

主催 沖縄県早朝野球協会

後援

沖縄県野球連盟 那覇市教育委員会 豊見城市教育委員会 沖縄タイムス社
沖縄県公園スポーツ振興協会 NHK沖縄放送局

沖縄県早朝野球協会顧問

我喜屋優監督、感動をありがとう！

～「センバツ優勝報告会」開催～

興南高校野球部を率いる我喜屋優監督の「センバツ優勝報告会」（沖縄県早朝野球協会・我喜屋優野球応援隊主催）が10日、J A真和志で開かれた。我喜屋監督は、沖縄県早朝野球協会発足当初から19年に渡って同協会顧問を務めている。会場には大勢の野球仲間が駆けつけ、センバツ優勝監督による報告を熱心に聞き入った。

労をねぎらった。

続いて、第2弾の優勝報告である代表インタビューに移った。

司会者から「朝の散歩を日課として習慣づけるなど、選手たちの感性を磨く指導を日頃からしているそうだが、野球が強くなることと重なるのか」など、主に教育的な視点からの質問が続いた。紙面の都合で、一部要旨は次のとおり。

逆境を順境に替えた

——センバツでは、打てないイメージのあった興南ナインがよく打ち、エラーをしても、それに引きずられずに常に積極的でした。その姿を見て県民は大いに感動しました。そのような選手に育て上げることができた秘訣は？

我喜屋 昨年の九州大会は、ベスト4止まりで帰ってきました。その準決勝では、県予選をノーエラーできたチームがミスを重ね、打線もそれにつられて焦り、ゲームのリズムを失ってしまいました。これが、反省という大きな土産になりました。

つまり、「あのエラーは、自分たちの力を過信して練習を怠った結果である。しかし、あの点差からいうと、エラーだけのせいではない。打ち勝つ力がないと、センバツの切符を正式に受けとつても、出場校と肩を並べて戦えない」という反省です。

沖縄に帰ってきてからセンバツ出場が正式に決まるまで、その反省に基づき、メリハリの利いた練習を重ね、反省を繰り返しました。その結果、スイングは1日1000本近くになりましたし、個人ノックも最低50本になりました。走塁についても「このままではダメだ。新しく生まれ変わらなくてはダメだ」というテーマを与えました。

センバツ出場が正式に決まった頃、チームのレベルは全国並みに届き、大会までの微調整のなかで選手たちに、ミスをプラスに替える、いわば精神コントロールのテーマを与えました。

つまり、「試合では当然、エラーがある。かといって、失敗して悲しんだり、ガツカリしているヒマなんかない。逆に、ホームランを打つても喜んでるヒマはない。試合の結果は、最終回が終わるまで出ない。最後まで、その気持ちを忘れるな」と。

このように、九州大会の反省のなかから生まれ、選手たちの身になったものが、今回のセンバツへ

報告会はず、35年前に（豊見城旋風）を巻き起こした浜川太会長が開会の挨拶に立ち、そのなかで「自分は、我喜屋監督が主将を務めた（興南旋風）を見て感動し、野球を始めた。だから（豊見城旋風）は（興南旋風）がなければ吹かなかった」と述べた。

続いて、FM21の人気DJ・比嘉直人さんが「興南高校が激突したチーノがいかにかに強豪であったか！」について持論を披露し、決勝戦のNHK映像をあらためて皆で観戦した。

そして、大きな拍手で迎えられた我喜屋監督が第1弾の優勝報告。「皆さんの声援が後押ししてくれた。再びこうしてお目に掛かれてうれしい。たまっていた疲れがすっ飛んだ」と、感謝の言葉で締めくくった。

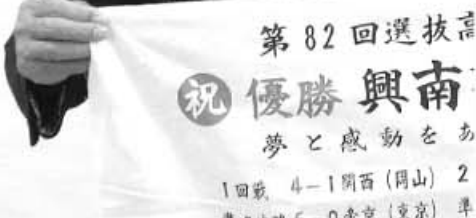
節目の大会に快挙

石原昌弘・我喜屋優野球応援隊長 名誉会長の音頭による乾杯の後、元球児たちが次々にマイクを握った。50年前に沖縄勢として初めてセンバツ出場を果たした那覇高校野球部の選手・嘉納勝さんは「節目の大会にすばらしい快挙を成し遂げた」。

あと一歩のところであつた甲子園出場が夢と消えた那覇高校の名（迷？）3塁手だった西銘恒三郎さんは「感謝の気持ちでいっぱいだ」。

我喜屋監督とともに選手として（興南旋風）を巻き起こしたチームメイト・上原良則さんは「よくやってくれた。感激した」。

長年の我喜屋野球ファンである真栄城毅さんは「優勝パレードがみたい」と、それぞれ熱く祝福し、



優勝報告をする我喜屋監督